

佐賀市 31 歴史探訪

ついでに はんしゃろあと ふくげんてつせい たいほう 築地反射炉跡の復元鉄製大砲

佐賀市立日新小学校の片隅、築地反射炉の記念碑のそばに、^{ちゅうてつ}鑄鉄製大砲24ポンドカノンの復元品が据えられています。これは東京に1門だけ現存していた佐賀藩所有といわれていた大砲を忠実に復元して昭和52年に製作されたもので、県立博物館のテラスにも同じものがあります。

佐賀藩は主として長崎防備のため、築地^{たふせ}と多布施の2カ所に反射炉を建設し、多数の24ポンドカノンや36ポンドカノンを鑄造しました。それは幕末近くになって日本近海に出没するようになった黒船(外国船)の脅威に対抗するためです。黒船を打ち払うためには多数の大砲がいる、鑄鉄製大砲を作るためには反射炉がいるということで、佐賀藩以外でも各地で反射炉建設が計画されました。

これらの反射炉は全て、1826年にオランダで書かれた『ロイク王立鉄製大砲鑄造所における鑄造法』という1冊の本を教科書として建設されています。そのなかでも、佐賀藩の築地反射炉は最も早い嘉永3年(1850)に操業し、後に建設された多布施反射炉は最も多くの大砲鑄造に成功しました。

オランダ語による解説とわずかな図面だけで、反射炉建設という大事業に挑んだ各地の技術者たちの苦闘は想像を絶するものがあつたでしょう。にもかかわらず、安政6年(1856)に幕府が外国からの武器購入を許可すると、こうした反射炉に対する情熱はにわかに冷めてしまったようです。佐賀藩の2カ所の反射炉も安政年間以降は、いつまで操業が続いたのかよく分かっていません。赤さびた24ポンドカノンはそうした歴史を教えてください。

一口メモ

オランダの1820年代の技術で鑄造された24ポンドカノンは、球形の砲弾を先込めするもので、幕末ですでに旧式化していました。後に佐賀藩がイギリスから購入したアームストロング砲は、当時としては最新式の元込め砲で、^{ぼしん}戊辰戦争では大きな威力を発揮し、「佐賀の大砲」として恐れられました。



▲築地反射炉跡の記念碑



▲復元24ポンドカノン



▲県立博物館の24ポンドカノン

